

「カタカナ語教育学と数学教育の現況」(講演要項)

2017/08/26, 15:15 ~ 17:00, @同志社中学校(京都)

小島 順

近数協からはじめに提案された題目は「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」であった。これは昨年12月の「中教審答申」の中の、「何を学か」に続く「どのように学ぶか」についての標語そのものである。答申に続く本年3月の「学習指導要領」でついに「アクティブ・ラーニング」の文言が消えたことを喜んだ私としては、このカタカナ語を表題に入れたいしなかった(「ディープ・アクティブラーニング」などと取り繕う必要もなくなったのに!)

そこで「カタカナ語教育学と文科省支配」という表題はどうかと私の方からは提案した。私は「東数協ニュース」に、この表題の連載を始めており、近数協から声がかかった直接のきっかけもこの連載だと理解していた。

これに対して近数協からは「文科省支配」とりわけ「支配」という表現への「懸念」が伝えられた。私自身も実は「文科省支配」はぴったりこない、という思いを強めていた。国家戦略特区と可計学園をめぐる首相官邸(内閣府を含む)と文部官僚の一部(特に前川喜平・前次官)の関わりを接して、私たちが対峙しているのは文科省支配よりは「官邸支配」であると痛感した。また、中教審より危険なのは安倍が自ら取り仕切る「教育再生実行会議」の方であり、これは日本会議系の色が濃く、発足時のメンバーは安倍、菅、下村の他に、八木秀次、加戸守之などである(座長は早稲田大の鎌田総長、副座長は三菱重工の佃和夫)。

こういう事情で、私は「カタカナ語教育学と数学教育の現況」という題目を再提案し、これに落ち着いた。

「アクティブ・ラーニング」あるいは中黒なしの「アクティブラーニング」という(言語としては意味不明で、行き着く先は教育の劣化でしかない)キャッチコピーを売り込むことで自らの生き残りを図る御用学者の一群と、それに簡単に乗せられてしまう周りの人々を揶揄するために「カタカナ語教育学」という言い方を使った(これと異質な、尊敬できる教育学者が多数いることも強調したい)。

表題の後半である「数学教育の現況」を、我々は的確に把握しなければならない。そのためには、言葉の真の意味での「主体的・対話的で深い学び」が我々自身に要求される。数学教育の思想・哲学・科学を土台から学び直そう! それは遠山啓の志を受け継ぐことであるが、同時に彼の理論の一部を見直すことにも繋がるだろう。「他との真摯な対話」は学びの本質である。教育学者を含めての他分野の人々の声にも耳を傾け、我々の「数学教育」を前進させよう。

(「講演要項」というより、演題の由来を述べた文章になって申し訳ない。)